

INFORMATION

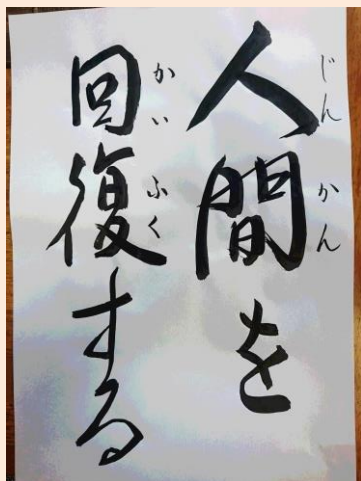
お寺・la・la らいぶ

日 11月25日(日)
 時 13:15 開場
 13:30 開演
 終了後 茶話会

演目「食道楽」
 (北大路魯山人)
 「ばけものつかい」他

「IMS やまねこ屋」さんによる読み聞かせとも朗読劇ともちょっと違ったリーディングパフォーマンス。今年で4回目となりました。楽しいお話の世界を満喫できます。

今月のことば



人間(にんげん)と書いて、人の間を生きる人間(じんかん)とも読みます。関係性を回復していくことが人間を回復するということなのかもしれません。

境内の花々



同朋会コーナー

十月同朋会より

住職法話抜粋『人間(じんかん)を生きる』

先日、お話をする機会があった時に参加者から「最近の若者が死を畏(おそ)れないのはなぜでしょう」という問いかけがありました。仏教では五つの畏れ(おそ)れ)として「不活畏」(生活が成り立たないことへの畏れ)「悪名畏」(悪名が広がることへの畏れ)「大衆威徳畏」(社会的に反することを世間から外されることへの畏れ)「命終畏」(命が終わることへの畏れ)「悪趣畏」(悪い関係性への畏れ)があるとされています。これは全て人間が人間(じんかん)として人との関係性の中で存在していくうえで出てくる畏れです。現在、人との関係性がなかなか持てなかつたり希薄であつたりするせいで生への実感も薄れ、死への畏れへの実感もできないのかもしれない。

前住職法話一部抜粋『歎異抄 後序』より

教えと呼ばれるものには真実の教えとその教えをわかりやすく導くための仮の手段としての「方便」の教えが混じり合っています。そこで方便を見分けて真実をはつきりさせ、仮の教えに惑わされることなくまことの道を歩むことこそ親鸞聖人の教えにかなうものでありましょう。

私たちはどんなに教えを聞いても自分の考えや経験から離れることが難しく、素直に聞いて入るといことがないので、それぞれ違った受けとめになってしまします。「信」とは知る、「心」とは受容すること。阿弥陀の心を知ってそれをそのまま受け入れることで、都合のいい「私」が見えてきて、自分がどうい存在であるか、どう生きたら自分らしくなるか、見つめることができるのです。

次回 同朋会 案内

十一月十日(土)
 午後一時〜三時半
 茶菓代 500円
 持ち物(あれば) 勤行本・数珠
 どなたでも参加できます。

『徳泉寺報』後記

この『徳泉寺報』の発行からちょうど1年が経ちました。徳泉寺の様子を少しでも門徒の皆様と共有できたと始めた寺報です。ここから徳泉寺の一年間を感じていただけたら嬉しく思います。